

いう人命を預かる立場から、近隣の親しい医師と医学上の情報交換を盛んに行っていた。新しい医学上の情報を入手すると、直ちに鎖国の藩医に伝えられ、遠隔の藩に迅速に伝播していつて医学の恩恵は広く庶民にまで光が当てられるようになった。

これに加え、徳川幕府の要路は、早くから医学の導入に積極的であり、貿易独占の謝礼に江戸に参府するオランダ商館長に対し、最新の医療器具や医書の献上を要請すると共に、医師の同行を条件づけた。

オランダ商館長一行の長崎から江戸までの長い旅の途次、各地の医師は競って宿舎を訪ねて新しい医術の受容につとめた。この史実は、幕府や官医にもたらした情報よりもはるかに多くの「医学伝播の道のり」の役割を果たしてきた。

一方、オランダ商館長一行も日本の事情を詳細に調査して本国に情報を送り、これに基づき日本が要望する最新医学情報を日本にもたらす成果をあげた。

従って、江戸時代の「鎖国令」という法令は全く存在せず、キリシタン禁制と日本人の出入国を禁止と、各藩が勝手に各国と交易しては幕藩体制に大きな支障となる芽を刈り取った政策は当然の措置であった。このことは、元禄時代に来日したケンペルが帰国後に書いた論文に日本の「鎖国論」として発表したが、これが幕末近くになって志筑忠雄によって翻訳されたもので、時代が明治と替わり、新政府に迎合する歴史学者が「鎖国」の用語を「開国」の用語との対応語として生

れたものであった。

北は松前、東は朝鮮半島、南は唐、清の渡来船、出島からの西欧文明が受容され、周辺諸国との交流があった史実が、江戸時代の日本に鎖国は無かったことを如実に物語るものであるといえよう。

(平成五年九月例会)

三浦梅園の生理学体系

——とくに臓腑・経脈・筋骨の機能について——

近藤 均

生理学に限らず、一般に三浦梅園（一七三三〜八九年）の学問的探究の方法は、主著『玄語』から知られるように、二分割の繰り返しによって事象を分析することであった。二分割のさいに基本モデルとされたのは天と地であり、天地のイメージから派生する上下・精粗・軽重などの観点から、さまざまな事象が二分された。この方法を応用して人間存在のトータルな把握をめざした、その一応の成果が、『玄語』所収の「混糲気体」（『混気＋混体＋糲気＋糲体』の体系である。「気」とは形のないもの、「体」とは形のあるものと理解すればよい。「混気」「混体」とは、個々の人間に遍在している気・体、「糲気」「糲体」とは、偏在している気・体のことである。これら四者が統合されているのが人間であり、その生理的活動の主体は、糲体に属する内外の「臓腑」である。